

慈濟

ものがたり

マカハイ子ども団
音符に乗って飛び出そう





● 扉の言葉 文・證嚴法師 訳・済運 撮影・蕭耀華

幸福という保護膜

平安に感謝し、幸福を造って未来を迎えましょう。

心で善いことを思い、善い言葉を口にし、身でもって善行するのです。

善人は集まって、和氣藹々と接し、互いを受け入れ、

仏法を学んで心に取り入れ、

誰もが幸福をもたらし、慧命を成長させます。

吉兆が保護膜のように結集して、この世を守るのです。



様々な家庭の子どもたちが、慈済花蓮子どもエンパワーメントプロジェクトに参加し、楽しく歌っている。「マカパハイ子ども団」は2020年に、リラ傑人杯音楽コンクールの花蓮地区大会・団体の部で優勝した上に、ソロ部門でも6つのトロフィーを獲得した。団員たちは壇上に上がって、うれしそうに賞を受け取った。



慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】	タンプポの力	慈願／訳	4
----------	--------	------	---

【主題報道】	マカパハイ子ども団・音符に乗って飛び出すステージに立つ前に	高嶋由紀子／訳	10
	パパ、一番になったよ！	惟明／訳	28

【国際慈善 年末の災害支援 ボランティア大動員】	フィリピン・三万世帯の心配	高嶋由紀子／訳	38
	マレーシア・九千人が一斉に支援に赴く	葉美娥／訳	46
	アメリカ・配付と寒波の競争	葉美娥／訳	54

【證嚴法師のお諭し】	人々の心に愛があれば、人助けをすることができ	慈願／訳	62
------------	------------------------	------	----

【人物誌・インドネシア】	ソフィアンの成功創業記	葉美娥／訳	68
--------------	-------------	-------	----

【世界に目を向ける】	台湾、ミャンマー、フィリピン、インドネシア	御山凜／訳	74
------------	-----------------------	-------	----

【親と子と教師、三者の本音】	上の子に成りたくない	明湑／訳	86
	謝ることはそんなに難しいの？	本諦／訳	91

【新書のすすめ・『真実を語る人』】	人生を以て人生を記録する	常樸／訳	96
-------------------	--------------	------	----

【行脚の軌跡】	福を積み、造る	済運／訳	100
---------	---------	------	-----

	三月の出来事	済運／訳	106
--	--------	------	-----

タンポポの力

慈済（ツーチー）は昨年、冬を迎えた頃から各地で地域歳末祝福会を行ってきたが、新芽奨学金認定授与式も、それぞれの地域で開催された。多くのケア世帯の子供が、優秀な成績やその他の各方面で表彰を受けた。

その中で注目を浴びていたのが花蓮の「マカパハイ子ども団」である。彼らはクリスマスの前夜に集まり、花蓮慈済本部・社会福祉チームの付き添いの下にカードに願い事を書き、クリスマスツリーの一番上の「希望の星」を囲むように吊るした。

今月の主題報道の主人公は、その「マカパハイ子ども団」である。慈済花蓮本部の子どもエンパワーメントプロジェクトの一項目として、二〇一九年

に活動が始まった。主な団員は慈済長期ケア世帯の子供たちで、合唱などの多角的学習を通して、学業以外の面で自我を高める機会を与えている。

教育は常に貧困を覆す踏み台とみなされているが、それは慈済慈善事業の中で長期にわたって注目されてきた主題でもある。貧富の格差の広がり、ここ二十年來のグローバル化と社会の変化に伴って顕著になっているが、生活の困窮からやむを得ず海外へ出稼ぎに行くこともその一例である。この二年間、コロナ禍で経済が打撃を受けたことで、中低所得者が増え続けている。

貧困家庭の子供たちは、教育面で十分な支援が得られないために中途退学を選ぶなど、学業が継続できなくなり、将来の生計も制限を受けることになる。中産階級の家と比較して、そのような家庭の次世代は将来への夢を描

けないと同時に、社会資源との繋がりが薄いため、孤立によって傷つくことになる。

成績が優秀であっても、家庭の負担を増やすまいとして、より良い学習機会を放棄する子供もあり、皆と異なることを感じて、劣等感を感じかねない。また、家庭が困難な状況にあっても、両親を心配して、施設への入所といった社会福祉機構の手配を受け入れたくない子供もいる。

社会的価値観として学歴至上主義の考え方が根強い中で、私たちは、このような子供たちが自分の潜在能力を発展できるよう、導くことはできるのだろうか？それにはまず、成長過程において、彼らは自分が「愛されている」感覚を享受すべきである。そうすれば、貧しい環境の中に見えるように見えても、自分の価値観に一層の磨きをかけ、人生の方向を如何に掌握するかを知

ることができるとある。

「マカパハイ子ども団」の合唱指導をしている陳耀笙（チェン・ティアオシヨン）先生の教えの下に、子供たちは歌う楽しさだけでなく、その中から自律や受容、包容を学んでいる。団体行動の中から子供たちは愛されていると共に重視されていることを感じ、徐々に心を開いている。この交流の過程は感動的であり、人々に啓示も与えてくれる。

證嚴法師は、よくタンポポに喩えてこう言う。子供は心に愛が満ちていれば、たとえ貧しい環境に生れても、いつか強い新芽を出すことができるものだ。混沌した中にいる子供たちがタンポポのように、不撓不屈の力を発揮してほしい、と願わずにはいられない。（慈濟月刊六六三期より）

音符に乗って 飛び出す

台湾先住民アミ族語の「マカパハイ(Makapahay)」とは、「最もきれいな、最も美しい」と言う意味である。「マカパハイ子ども団」も素晴らしい集まりである。メンバーは花蓮の様々な家庭から来ているが、笑顔で歌っている。気ままに歌うことで、生まれ持った才能を存分に発揮すると共に、謙虚になって、仲間とハーモニーを醸し出し、一緒に合唱の素晴らしさと魅力を表している。

文・張郁梵 撮影・蕭耀華 訳・明陞



2019年3月から「マカパハイ子ども団」は2週間に1回、花蓮の慈済志業パークで合唱の練習をしている。2021年のクリスマスイブは学期末ということで、メンバーは互いに祝福し合った。



ステージに立つ前に

文・張郁梵 撮影・蕭耀華 訳・高嶋由紀子

自信のなかった子が大声で歌い、
おどおどしていた子が付き添いで舞台上に上がる。
ようこそ「マカパハイ子ども団」へ。
さあ、自分の人生のスターになろう！

部屋を包むゆったりした音楽が、もう
すぐ訪れるクリスマスの気分を盛り上げ
ていた。二〇二二年最後のクラスの日、数
人の子どもがクリスマスツリーに向かっ
て必死に爪先で立ち、願い事を書いた
カードをツリーのてっぺんの「希望の星」

に掛けようとしていた。まるで高ければ
高いほど願いが叶いやすいかのように。
「希望の星」はほどなく願い事がびっし
り書かれたカードで埋まってしまった。
「百八十センチまで背が伸びますよう
に」、「憧れの舞踊団に合格して舞台上に立

てますように」と願う子もいれ
ば、「両親が大金持ちになります
ように」と願う子もいた。子ど
もたちの素朴な願いには思わず
頬が緩む。しかし、中には緩ん
だ頬が引き締まるような願いも
あった――。

「誰かが私を愛してくれますよ
うに」、「私たちを愛してくれて
ありがとう」、「みんなどんな歌
がうまくなりますように」。ほん
の短い願いや感謝の言葉には、子
どもたちの純粋な渴望が表れて
いた。そこからは「マカパハイ子



Profile マカパハイ子ども団

設立：2019年3月

対象：花蓮県北区での慈済花蓮本部
の長期支援家庭の子ども

時間：隔週土曜日午後

地点：花蓮の慈済志業パーク

内容：合唱練習、潜在能力発見、
文化教育、ボランティア、
演奏・演技の披露

ども団」が子どもたちに与えてくれた温もりだけでなく、子どもたちの大事な居場所となっていることが伝わってくる。

学業支援と同じくらい重要なこと

「私たちは生命力や希望を込めて楽しく歌っています」。

この日は陳耀笙（チェン・ティアオ ション）先生の指揮で、数十人の団員が輪になって団の歌を歌った。最後のフレーズ「ヤー！ Just マカ・ハイ」で一斉におどけた顔をして独創的なポーズを取った。

「マカ・ハイ」は「美しい」という意

味のアミ族の言葉で、最高とか最も美しいことの総称である。二〇一九年三月に団が結成された後、最初の集いの際、団を指導する陳先生がメンバーから団名を募り、熱い議論と投票を経て、団名は「Just マカ・ハイ合唱団」に決まった。

慈済基金会慈善志業発展処東部社会福祉室のソーシャルワーカーである蔡惟欣（ツアイ・ウェイシン）さんはこう説明した。「マカ・ハイ」は花蓮本部子どもエンパワーメントプロジェクトの一つで、慈済が長期的に支援をしている家庭の子どもを対象に、隔週の土曜日午後に集まって活動しているという。二〇二〇

年には、活動範囲をさらに拡大し、多様な学習方法を開発した。それに伴い、団員が自分の興味を見つけ、潜在能力を伸ばせるようにと願って、団名も「マカ・ハイ子ども団」と変えた。

子ども団を結成したのは、ソーシャルワーカーたちが家庭訪問の際にあることに気付いたからだ。社会学的な見方をすると、社会的弱者の位置付けが、「階層ごと複製」されるように次世代に貧困が受け継がれ、抜け出すことのできない檻となつていくという。従って、教育はそのような貧困の連鎖から子どもたちが抜け出すための踏み台になる。だが、実際

にこれらの家庭を支援するソーシャルワーカーたちが気付いたのは、子どもの食事や学費の心配が解消され、親に意欲があつて、子どもの勉強を見てやろうと思った時、親の教育程度が低ければ難しいということだった。

確かに慈善団体が提供する奨学金は貧しい家庭の子どもを励まし、学業に専念させている。しかし、学校の成績を支給基準とする制度のままでは、多くの子どもを励ますことにはならない。そのため、慈済では学業成績を含む五項目を支給基準とした「新芽奨学金」を創設し、多様な側面から成長を支援することにした。



↓初めて打楽器のレッスンを受けるメンバー。
ソーシャルワーカーのサポートを受けながら
練習するうちに、だんだんとリズムが取れる
ようになった。

↑「マカパハイ子ども団」の団員が打楽器の先生について、机をパチで
叩いてリズムの練習をしていた。



ただ、奨学金の授与式は年一回きりなため、普段は子どもとコミュニケーションを取る機会があまりない。そこで、花蓮本部社会福祉チームは「子どもエンパワメント計画」を発案した。

エンパワメントとは、自分の長所を伸ばし、社会的競争力を高めることによって将来の自立を促すもので、近年、社会においてしばしば言及される概念である。慈善志業発展処社福室でソーシャルワーカーを務める呉承渚（ウー・チョンハオ）さんは、「どの子にも必ず才能があります。『子どもエンパワメント計画』はさまざまな機会を提供し、すべての子どもが安心して学校に行けるだけで

17歳の玖玖さんは、弟に次いで子ども団に入った。他の団員よりも年上だが、歌やダンスに真剣に取り組む姿は、みんなのよい模範となっている。

なく、各自の才能を伸ばし、未来を生き抜く力を育むことができるよう支援しています」と話す。

しかし、どうすれば家庭環境も年齢も性格も異なる子どもたちが一緒に学べるだろうか。あれこれ考えた結果、「歌うことには何よりも心をつなぐ力がある」ということで意見が一致した。最初の団名が「Gesamakaハイ合唱団」になったのもそのためだと蔡さんが補足した。

しかし、大変さは予想以上だった。最初のレッスンの日には想定外の状況が



慈済基金会 教育エンパワーメント

- ✓ 偏境地域の小中学生への栄養補給と課外学習支援：48校
- ✓ 夏休み貧困児童栄養サポート：51,184世帯、94,683食
- ✓ 貧困家庭の子どもにノートパソコンを寄贈：計4,849台
- ✓ 新芽奨学金の支給：計9,333人

・2021年1月～12月の統計

学費補助

学習環境の改善

学習空間の改善、設備の補充

偏境地域の学校教育支援

給食、学習設備補助金

学習サポート

合宿成長クラス

青年学生エンパワーメント

新芽育成、偏境の学校の人材育成、エンパワーメント地元の団体との共同公益活動、ナビゲータープロジェクト^②

次々生じた。メンバーの年齢差が大きく、募集時に特に選考も行わなかったことで、ベルにも差があり、練習は思ったようには進まなかった。楽譜の一段目も終わらぬうちに、もう我慢できない子が出てきた。勝手に席を離れ、寝転んだり、走り回ったりした。まるで学級崩壊である。

「学校で授業中に勝手に席を離れたら、厳しく叱られたり罰を受けたりするでしょうが、私たちは教える方の都合を押し付けて子どもたちがのびのびと成長する機会を制限したくないのです」。

「マカパハイ」の理念は、子どもの本来の個性を大事にしながら、なんとか方

←^② ナビゲータープロジェクト：

新芽奨学金制度の延長線上にあって、2020年3月から始まったプロジェクト。貧困家庭の大学生の多くが、外でアルバイトをした際、差別的な職場環境に遭遇したため、慈済が長期休暇の間、東部地区支援世帯の大学生をアルバイトとして受け入れた。ナビゲーターたちは夏休みの合宿で活動や講座の企画をしたりするほか、慈済のケア世帯の子どもの学習を1対1でサポートしている。また、ナビゲーターの専門や興味関心に応じて、プロジェクトの中で記録や撮影、動画の編集などを行っている。

法を見つけて、マナーや自律の重要性を理解してもらおうということにあるのだと蔡さんは力を込めた。

「自分ができる」と知ってほしい

陳先生は教師歴四十年以上、教育部が全国の優れた教師に送る師鐸賞を受賞したこともあるベテラン教師だ。彼女は、何回かレッスンをするうち、子どもたち

がリズム感や身体表現のセンスは優れているにもかかわらず、学習の機会や音楽環境に恵まれず、適切な指導を受けられなかったことに気付いた。また、自分の境遇を気にして多くの団員は自信が持てず、なかなか口を開いて歌おうとはしなかった。暮らしの中で困難に直面した時も、自分には解決する能力がないと思い、尻込みしてしまっていた。

「私たちにできるのは、子どもたちに

去年のクリスマス前の集いで陳耀笙先生（中央の指導を受けて輪になって歌い踊る団員たち。体を動かしたりレクリエーションをしたりしながら合唱の発声練習をしていた。

自分の能力を知ってもらうことなのです」。

歌や踊りが大好きな小廷は、結成時からの団員だ。歌や踊りの能力はすばらしいのに、自分に全く自信がなかった。陳先生は、小廷には潜在能力があるを見て、ソプラノを担当させることにした。ステージに立つ機会を与え、挑戦する過程で自信をつけさせていった。

子ども団は二〇一九年に花蓮の新芽奨学金授与式で初めてステージに立ち、客席から盛大な拍



手を受けた。勇気をもらった小廷は、その後、子ども団のメンバーと一緒に遠雄海洋公園での「フラッシュモブ」で歌うことに挑戦

した。小廷は、「綱渡りみたいですごく勇気がいるけど、子ども団の仲間がいるから怖くない」と言った。

団員の欣欣（シンシン）と姦姦（ロウロウ）の姉妹は、

2021年子ども団の年末の集いでは、団員たちは新年の願い事や感謝の言葉をカードに書いて、クリスマスツリーのてっぺんの「希望の星」に掛けた。



休日になると七星潭で母親が出している屋台の手伝いをする。アミ族の血を半分引いた彼女たちがたまに民族衣装を着て呼び込みをすると、多くの観光客が足を止めて一緒に写真を撮って行く。

姉妹はとても活発で、演技や演奏も好きだ。だが、母親の孫さんはこらえきれず暴露した。欣欣は歌うのは好きだが、しょっちゅうテンポが走ったり遅れたり、キーが上がったり下がったりするので、リズム感がない父親でさえ、音痴だとからかうことがあるそうだ。そのため、欣欣は家族以外の前では踊ろうとせず、気軽に歌も歌おうとしなくなった。しか

し、子ども団に入ってから、歌が上手になっただけでなく、より勇敢になったという。

孫さんは、新芽奨学金授与式で初めて子ども団が演奏した時のことを話してくれた。ステージでちょうど欣欣の横にマイクがあったという。

「決められた位置に立ったら、あの子の目の前にマイクがあったのです。それであの子はとても緊張してしまいました」。

しかし、欣欣は勇気を持って最後まで歌いきった。

「歌い終わった瞬間のほっとした表情を見て、そのステージが彼女にとって大

きな一歩になったことが分かりました」。

姉妹は集いが終わるといつも楽しそうにその日のことを話してくれる。

「あのお兄さんやお姉さんがどうこうとか、先生がこう言ったとか、仲間が面白いことをしたとか……。普段学校に行く時は、何度せかしても遅刻寸前になるまで出て行かないのですが、団の集いの日には何も言わなくても、前の晩から持ち物を準備したり、着ていく服を考えたりしています。ステージに立つ前は、前もって自主的に家で練習もします」と孫さんは笑った。

子ども団は今では姉妹に言うことを聞

かせるための秘密兵器となっている。欣欣と姦姦が宿題をしなかったり、物を散らかしたり、自分の食器を洗わなかったり、何度言っても言うことを聞かない時は、「ちゃんとやらないと集いに行かせないからね」と警告すると、子どもたちはすぐに聞き分けがよくなって、生活が規律正しくなるのだという。

心理学の研究結果によると、IQよりも「自律性」の方が、その人の将来の学業成績、仕事の業績や健康状態を予測できるといふ。自律性というのは、決められたルールを守り、規定通りに物事を行うということだけではなく、一時的な満

足を先延ばしにして、好ましい選択をすることである。たとえば、アメリカスタンフォード大学が一九六〇年に行った「マシユマロ実験」では、「セルフコントロール」ができ、「目の前の享樂を先延ばし」して、その先のごほうびのために我慢できる人ほど、人生で直面する様々な困難に立ち向かうことができることが証明されている。

自律性は一朝一夕にして生まれるものではない。子ども団では、社会のサポートの下で子どもたちによい習慣を身につけてもらいたいと考えている。

「歌が好きでなくてもかまいません。参

加したい気持ちがあるなら、どうぞここに来て友達を作ってほしいと思います」。

合唱は子どもたちが家の外に足を踏み出すきっかけになっていると蔡さんは言う。

「みんなと一緒に活動することで、プラスのつながりができ、自信と自律性が育つのです。団員一人ひとりがこの過程を通じて自分に挑戦し、よりよい自分を生きてほしいと願っています」。

団員が兄弟を連れてくることもあるという。

「兄弟姉妹全員で来た例もありますよ。そういう時の雰囲気はすばらしい



↑ 2020年のリラ傑人杯音楽コンクール花蓮地区大会で、子ども団はすばらしい歌声を披露した。団体の部で優勝だけでなく、ソロの部でも6つのトロフィーを獲得した。団員たちはナビゲーターの先輩に付き添われ、壇上でうれしそうに賞を受け取った。(写真提供・花蓮本部)

ものです」。

去年九月二十八日、蔡さんのもとに団員から「教師の日おめでとう！先生、いつもありがとう！」というメッセージが届いた。そのメッセージを見て、蔡さんの目に涙が溢れた。

「私はソーシャルワーカーですし、子

どもたちに先生と呼んでももらえるとは思ってもみませんでした」と彼女は言った。この短い言葉は社会福祉チームにとって大きな励みになった。彼らに「子どものエンパワーメント」の地道な取り組みを続けていく自信とエネルギーを与えたのである。(慈済月刊六六三期より)

パパ、一番になったよ！

文・張郁梵 撮影・蕭耀華 訳・惟明

溢（イー）ちゃんはクラスのひょうきん者で、彼がいる所には笑い声が絶えない。しかし、歌のソロコンテストでステージに上がる前は、皆が彼のことを心配した。「本当に大丈夫だろうか」？

一〇二〇年八月、リラ傑人杯音楽コンクール花蓮地区大会が花崗中学校のコンサートホールで行われた。赤いマフラをした溢ちゃんがステージに立ち、慈済の歌である「私の願い」を歌った。その時が彼にとって初めての独唱だったので、置き場に困ったのか小さな両手を

硬く背後に組み、硬直した体を動かしてはいけないと思いつながら、戦々恐々とした雰囲気の中で歌い終えた。

歌い終えると、溢ちゃんは審査員と観客に向けて礼をした。ステージ上での落ち着いた姿は、普段のヤンチャな様子とは結びつけることができなかった。彼を

指導してきた陳耀笙（チェン・ティアオシヨン）先生がこらえきれず、「本当にあの活発で、落ち着きのない溢ちゃんなの？」と叫んだ。

今回のコンクールでは、「マカパハイ子ども団」が団体部門で優勝しただけでなく、個人部門でも素晴らしい成績をあげた。小学二、三、四、五、六年生と中学一年生などの組でそれぞれ優勝し、合計六つのトロフィーを勝ち取った。

小学二年生の組で一番になった溢ちゃんは、優勝したと聞いた時は信じられず、優勝の賞状とトロフィーを受け取ってやっと我に返り、興奮気味に「勝利の品」

を持って仲間たちと喜びを分かち合った。そして、嬉しさのあまり、会場を出る前には既に賞状が破れてしまった。

慈済基金会慈善志業発展処東部社会福祉室のソーシャルワーカーである蔡惟欣（ツアイ・ウェイシン）さんは、コンクルの後で子供たちをマイクロバスで一人ずつ家まで送った時のことを振り返った。溢ちゃんは、バスが自宅前の路地に到着すると、ドアが完全に開き切るのも待ちきれず、跳び降りて出迎えに来た父親に向かって走って行き、喜びを分かち合った。

「一番になったよ！とお父さんに言っ

たのです」。そして、溢ちゃんの喜びにつりこまれて、皆が思わず笑い出したのだと蔡さんが語った。

ソーシャルワーカーの呉承濤（ウー・チョンハオ）さんによると、それは溢ちゃんの人生で初めてのトロフィーであり、初めて認められ、スポットライトを浴びる達成感を味わう機会となった。

天性の美しい歌声、
その光芒は覆い難い

二〇二〇年に「マカパハイ子ども団」に入団した溢ちゃんは、兄弟の中では

五番目で、上に四人の兄と姉がいる。普段は家族それぞれが生計の為に忙しくしていて、溢ちゃんは学校ではヤンチャで落ち着きがない。集中力に欠けるだけでなく、我慢が足りない。教師の協力を得て校内の特別指導を受けて改善に努めている。

彼も、慈済が主催する「東部地区ナビゲーターによるオンライン学習伴走計画」による付き添いの下で勉強している学童である。毎週の「オンライン伴走学習」でお互いに顔を合わせるが、ソーシャルワーカーは、「溢ちゃんはとても賢くて、反応が早く、学習能力も高

いのです」と言う。ただ集中力が続かないため、学習効果がなかなか上がらないそう。小学四年生になってもまだ九九を完璧に暗唱できないし、衝動を抑えられずに怒りっぽくなってよく同級生と揉め事を起こす。

溢ちゃんが初めて合唱団に参加した時、他のメンバーと言い争いを始め、取っ組み合いになった。「なぜ叩いたり怒ったりしたのかを彼に聞いても、これといった答えはなく、ただ気持ちが高

溢ちゃんは手のひらに「大好き」と書き、恥ずかしそうにボランティアに感謝の意を表した。



ぶって大声で叫ぶだけでした」と蔡さんが当時のことを思い返した。

合唱団の練習がある時はいつも、溢ちゃんは必ずゼンマイを巻いたかのように元氣一杯になり、よそ見をしたり、席を立てて教室中を走り回ったり、時にはメンバーに悪戯をした。溢ちゃんの悪戯は人の関心を集めたいからだ、と陳先生は気付いた。そこで、彼にステージで手拍子を取ってもらい、そして皆の前で、独りで歌ってもらった。

「私の側に立たせたのは実は彼への罰でしたが、歌い終わると、よくできた

褒めてあげました。彼を罰した後に褒め、

最後にステージで歌うようにと励ましました」。陳先生は、彼に合わせることで、クラス全体の学習進行に支障が出ないようにした。また毎回「罰」を与える過程で、溢ちゃんは音感が鋭く、厚みがあつてよく響く声の持ち主であることから、低音パートにとっても適していることに気付いた。そのため、積極的に彼を独唱コンクールに推薦した。「初めは、本当に一人でステージに上がることができたのかと心配しました。思いもよらず、パフォーマンスがよく、二年生チームで優

勝したのです」。

コンクールの前日、蔡さんは、メンバーが準備を怠って参加するのではないかと多少心配した。しかし、思いもよらず、コンクール当日、メンバーは全員ユニフォームに着替えると、様変わりしたようになり、そのパフォーマンスは素晴らしかった。その後、溢ちゃんが悪戯をしようとするたびに、「私たちは『君は一番でしょ』と言えば、彼は大人しくなり、落ち着いて授業を受けるようになりました。我々はこの「一番」は彼にとつて、とても大切に非凡な意味があることを

知っているのです」と言った。

子供の性格は生活経験から少しずつ形成られ、小学生の時は自己概念と自尊心を確立する大切な時期である。慈済大児童発達及び家庭教育学部の高麗芬（チャン・リーフェン）助教授の説明によると、仮に子供が成長過程において励まされたり褒められたりしたことがない場合、「自分はダメな人間だ」というイメージができてしまう。しかし、同級生との触れ合いを通じて、子供はポジティブな自分になることができるのだそうだ。

華人社会では学業成績に重点が置かれ



■歌唱コンクールで獲得した優勝トロフィーは、食卓横の棚に置いてあるので、親子で食事をしながら顔さえあげれば見えるのである。

がちなので、成績の良い子は認められやすい。溢ちゃんのように天性の歌声で周りに認められることで、自分を励ますことができ子もいる。「受賞」すること彼らは他人とは異なっていることを意識するようになる。

愛される能力を啓発する

マカパハイ子ども団にはもう一つの特徴がある。それは大学生を「サポーター」として勉強の伴走をしてもらうことである。蔡さんによると、合唱団を立ち上げ

た年の夏休み、同じタロコ族で特殊教育を専攻していた「サポーター」の佩蓮（ペイレン）さんが、様々な方法で溢ちゃんとコミュニケーションをとる試みをした。二カ月にわたって優しく忍耐強く寄り添った結果、やっと溢ちゃんは心を開いて人と対話する気になり、適時に感謝の気持ちを表現した。夏休み最後の授業の時、溢ちゃんは自らボランティアに頼んで、佩蓮さんとツォショットを撮ってもらった。何故なら、「彼女にお礼を言いたかったから」である。

慈済のソーシャルワーカーは特殊教育

の教師と連絡を取り合い、一緒に溢ちゃんの学習状況に関心を寄せた。ソーシャルワーカーの呉さんによると、今の溢ちゃんは周りの規則を心得ており、授業中は手をあげて、先生に聞いてから席を離れることを知っている。担任は、時には授業中に気が散ってよそ見をすることはあっても、もう悪戯はしないので、それだけでも大きな進歩だ、と語った。

長期にわたって寄り添うことで感情の絆ができたが、活動に参加することが、新しい知識や特技を習得できるだけでなく、団体の中で正しい人間関係を保ち、子供たちに「愛される」ことを学ばせる

機会にもなっている。

「愛される」ことは強要ではなく、完全な信頼関係である、と張助教授が言う。人は相手を信頼しきった状況において、初めて愛される能力が発揮できる。「普段からあまり愛されていない子供は、誰かが彼を愛していることすら知りません」。

溢ちゃんのように合唱団で「自分も優しくしてもらえるのだ」ということを学び、困難に直面した時、他にも自分を表現する方法があり、ボディランゲージや感情に走ることだけが問題解決になるのではないことを学んでいる。

張助教授は、アメリカの心理学者による一九九〇年のハワイ・カウアイ島における研究を例にあげた。七百人の不健全な家庭に生まれた「高リスクベビー」を対象に、四十年間にわたって追跡を続けた。研究で発見したことは、三分の一の子供は逆境を克服しただけでなく、成長してからも比較的健全な大人になった。そして、更に分析していくと、その良好な「回復力」を持った子供たちの周りには必ず、一人以上の「重要人物」が存在しており、成長過程で安定した支援を与えていたのである。

「子供は皆、前向きに励まして接して

ほしいと思っているのです」と張助教授が言った。逆に日常的に「叱られ続け」、「愛に渴望」している子供に、継続的且つ安定的に寄り添ってくれる人たちが存在しているのだと知ってもらえれば、交流するうちに彼らも正しいことを模倣するようになり、どうすれば愛されるかを学ぶようになる。

「マカパハイ子ども団」の存在は、きっかけとチャンスを提供することで、メンバーが集い、互いに家族のような存在になっていけば、絶えることのない温かさを感じ取ることができる、と私たちは信じている。（慈済月刊六六三期より）



三万世帯の心配

文・慈済フィリピン支部
訳・高嶋由紀子
撮影・郭嘉雯

スーパー台風「ライ」が上陸し、
中南部の群島を横なぎにした。
ボランテアは、
三手に分かれて
三万世帯余りを支援し、
被災者は瓦礫と化した大地に
希望の一步を踏み出した。

●フィリピン中部のボホール島は、台風22号によって深刻な被害を受けた地域の1つだ。台風上陸地点に位置する北部沿岸の村や町は、至る所が酷く損壊していた。



セブ州ラプラプ市の損壊した、ある学校で、校庭に静かに並んで待っていた千人余りの住民から、突然大きな拍手がわき起こり、多くの人が喜びのあまり涙さえ流した。

家族構成に応じて一万から二万フィリピン・ペソのお見舞い金を送るといふ慈済ボランティアの発表を聞いたのだ。ノルメリタ・ノダロさんは、大粒の涙を流して言った。「見ず知らずの人から、こんなに助けてもらえるなんて。胸が一杯です」。

小児マヒの障害を持つルノーさんも、目を潤ませた。「働いていた家具店は停電して、復旧まで三カ月かかるらしいです。収入がなく、三人の子どもも満足に食べさせることもできません」。台風で仕事を失ったが、そのお金で目の困難を乗り越えられると言う。

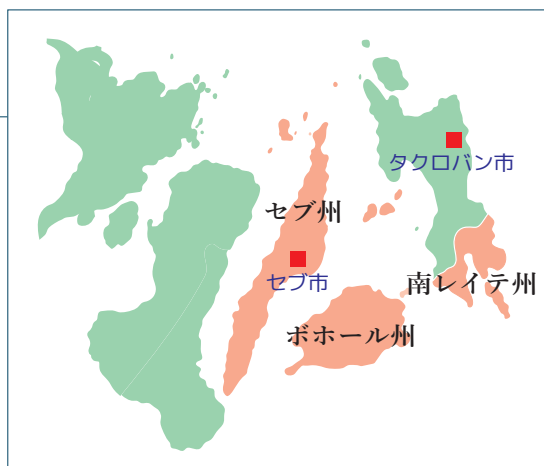
二〇二一年の年の瀬に、一年を通して最も勢力の強い台風二十二号「ライ」(フィリピン名：オデット)がフィリピンを襲った。七つの州が甚大な被害を受け、四百人以上が死亡し、六百万人以上が被災した。

【被災地支援概要】

台風二十二号（ライ）

- ・被災地域： 南レイテ州、ボホール州、セブ州
- ・支援物資： 9,068世帯へのお見舞金、白米400トン、毛布3,000枚、発電機5台、小型浄水器100台、常備薬・ビタミン剤等5,000パック
- ・対象世帯数： 延べ30,210世帯

2022年1月17日現在



■ 被災地域 ■ 慈済が支援を行った被災地

“見ず知らずの人から、こんなに助けてもらえるなんて。胸が一杯です……”

セブ州ラブラブ市
市民ノルメリタ・ノダロさん

海路で迅速に食糧を輸送

台風被害の大きかった地域では断水や停電が起き、食糧や飲み水が不足していた。慈済がマニラで購入した白米、浄水器と市民から寄付された物資が、海運会社による無償のコンテナで、迅速にボホール州、セブ州、南レイテ州に輸送され、配付された。ボホール州ウバイ町では、住民が1000世帯余りに配付する白米を運ぶ手伝いをした。（写真1）

寄付された物資を間違いなく被災者に届けるために、ボランティアは先ず災害状況を調査し、配付名簿を作成した。セブ州の配付会場では、被災者が配付物資の引換券を掲げていた。（写真2提供・フィリピン支部）見舞金を受け取れると知った被災者たちは喜びに沸いた。災害後は多くの業種が運営を停止したことで収入の途絶えた被災者世帯は、銀行でお見舞金を受け取って家を修築したり、必要な物資を購入することができた。



停電が続いたボホール州の被災地では、ボランティアがリレー式に物資を配付した。1月中旬までの統計によると、既に1万5千世帯が20キロの白米を受け取り、食糧不足の危機を緩和することができた。その後、トタン板と見舞い金も配付された。（写真3）

フィリピンは台風が多い。災害管理システムから警報が発令され、危険地域の住民を事前に避難させてはいたが、それでもこの台風の被害は甚大だった。三日間で熱帯低気圧からスーパー台風へと急速に変わった「ライ」は、縦に

細長いフィリピンの中南部の群島を横なぎにした。停電が連鎖反応を引き起こし、多くの被災地で通信が途絶えた。

深刻な被害を受けたボホール州、セブ州、南レイテ州を重点的に被害調査した慈済は、沿海地域の惨状を目の当たりにした。激しい暴風雨や高波に見舞われた村は、まるで廃墟のようになり、感染対策など気にする余裕もなく、住民が給水ステーションの前に長蛇の列を作っていた。ボホール島北部の被災した村に大きな船が流されて村に突進してきた。飢えた人々が道沿いに、「おなが空いています」と書いた段ボ―



ルを掲げ、支援を求めた。

被災地では飲み水や食糧が不足し、燃料の価格も暴騰した。慈済は急遽四百トンの白米を購入し、企業や市民から寄せられた物資と一緒に被災地へ運んだ。一月上旬には、延べ三万世帯余りに対して大規模な配付を実施すると共に、きれいな飲み水を得るための発電機と浄水器を提供した。

新年の初めに、住民は食糧やお見舞金を受け取り、ようやく一息つくことができた。復興の道のりは長いが、愛はずっとそこにある。

（慈済月刊六六三期より）



マレーシア・セランゴール州の大水害

九千人が一斉に支援に赴く

資料提供・慈済セランゴール支部
訳・葉美娥

年末が雨季になるのは例年と同じだが、洪水が瞬時に、繁栄している街に流れ込むのは稀なことだった。温かい食事の提供、家々の清掃、配付者名簿の作成など、慈済は年末年始に支援活動を完了した。

●フル・ランガッ地区のスリ・ナンディン公園周辺はひどく被災し、損壊した家具が家々の前に山積みになっていた。ボランティアは12月25日だというのにまだ廃棄物を運び出し、街の清掃を続けていた。（撮影・黎日泉）

【被災地支援概要】

マレー半島・セランゴール大水害

- ・ 主な被災地：セランゴール州、クアラルンプール市、パハン州
- ・ 温かい食事の提供：41,302食
- ・ 住宅の清掃：2,483棟
- ・ 支援にあずかった人の数：延べ38,857人
- ・ 見舞金の配付：1万6千世帯を対象に旧正月前に60回の配付活動を予定
- ・ 動員ボランティア数：延べ9,075人

■ マレーシア全土から動員されたボランティアの在住州

■ 主な被災地
慈済が災害支援と現地ボランティアを動員した州



ヌグリ・スンビラン州

2022年1月10日現在

マレー半島は毎年年末になると、北東の季節風の影響で雨季になる。

二〇二一年十二月十七日から豪雨が続き、十八日は一日の雨量が一月の総雨量を超えた。八つの州で水害が発生し、パハン州の被害面積が最も広く、セランゴール州も稀に見る洪水に見舞われ、甚大な被害が出た。クアラルンプール市内を流れる河川が氾濫し、夜中に発生した洪水は、年長者に五十年前の大水害を思い起こさせた。まるで大洪水が再来したかのように。

水は腰の高さから一階の軒下まで増え続け、住民はパニック状態で高い所に上つ

たが、海のようなになった街に向かって助けを求める声があちこちで聞こえた。慈済支部とボランティアの携帯にも、助けを求める電話が鳴り続けた。パハン州（Pahang）とセランゴール州のボランティアは、なんとか被災地や避難所にたどり着くことができ、被害状況を調査しながら、水の中を徒歩やボートで温かい食事を配付した。そして、即席食品、毛布、衣服、ゴザ、飲料水などの物資を届けた。被災地は停電のため、夜になると避難所は真っ暗になったが、それ以上に多くの人が被災地から出られず、雨が断続的に降り続いた。二十二日の午前中になつ

『災害はいつ発生するか分かりません。今日は他の人であつても次は自分が遭遇するかもしれない。お互いに助け合ふべきです。』

ペナン州 州民ニマ・シヨコファアさん

水と泥の中を行く

マレーシアは12月中旬から年始にかけて豪雨に見舞われ、多くの州で程度の差こそあれ、水害が発生し、各地の慈済ボランティアは緊急支援を始めた。セランゴール州の雨は特に激しく、住宅の2階の高さまで水位が達した地区もあった。大半の住民は何日も水で外出を阻まれていたため、慈済は緊急に温かい食事を届けた。(写真1撮影・許艶玲)

東海岸のパハン州は、低地のため、雨が降ると必ず浸水する。スンガイ・ニュービレッジ (Sungai New Village) は全地域が被災し、被災から2週間たつても依然として復旧が進まず、泥まみれの10世帯が慈済に支援を求めた。1月5日にセランゴール州やラウプ郡 (Daerah Raub)、ペナン州から駆けつけたボランティア100人余りが清掃にあたつた。(写真2撮影・黎日泉)



セランゴール州は洪水が引いた後、ボランティアが州都シャー・アラム (Shah Alam) のスリ・ムダ公園 (Taman Sri Muda) とクアラ・ランガツ地区 (Hulu Langat District) にあるスリ・ナンデイン公園周辺で集中して、3日続けて大規模な清掃活動を行った。軍隊と住民、慈済の三者が協力して、人種の分け隔てなく、被災地の復旧を行動で応援した。住民は人手が足りず、数日清掃してもあまり進展が見られなかったもので、これで早く元の生活に戻る、と協力してくれたチームに感謝した。

(写真3 撮影・黄麗霓)



てやっと、「水が完全に引いた」という奮い立つような知らせが入った。分厚い泥を被った市街地や住宅から、廃棄される家具や壊れた物が運び出され、路地や道にはいくつも山のように積まれていた。地面の水たまりやゴミを見ると衛生面が心配になった。

主な被災地の大掃除をしようと、二十四日から三日続けて、各界の善行者とマレーシア全土からの慈済ボランティア、そして軍隊を合わせた延べ六千人が清掃したエリアは三十三萬平方メートルに及んだ。参加した人は近隣の州からのボランティアだけでなく、北部と南部の

ボランティアも、清掃用具を持って数百キロ離れた所から駆けつけた。北部のペナン州から来たエンジニアのニマ・シヨコファーさんは、「災害はいつ発生するか分かりません。今日は他の人であつても次は自分が遭遇するかもしれません。お互いに助け合うべきです。今日は私にとって一カ月分の労働量で、疲れましたが、良い一日でした」と語った。

二〇二二年の元旦と二日には、延べ二千人のボランティアが再度主な被災地に入って一万世帯以上を訪問し、見舞金を配付するための名簿を作成した。

(慈済月刊六六三期より)



アメリカ
稀に見る冬の竜巻

資料提供・慈済アメリカ総支部 撮影・馬楽 訳・葉美娥

配付と寒波の競争

稀に見る冬の竜巻が
八つの州を直撃した。
十数万戸が厳冬の中で停電し、
街路はまるで戦地のようになった。
住民は、壊れた家に戻ると、
クリスマスイブ前に
予想外のプレゼントを受け取った。

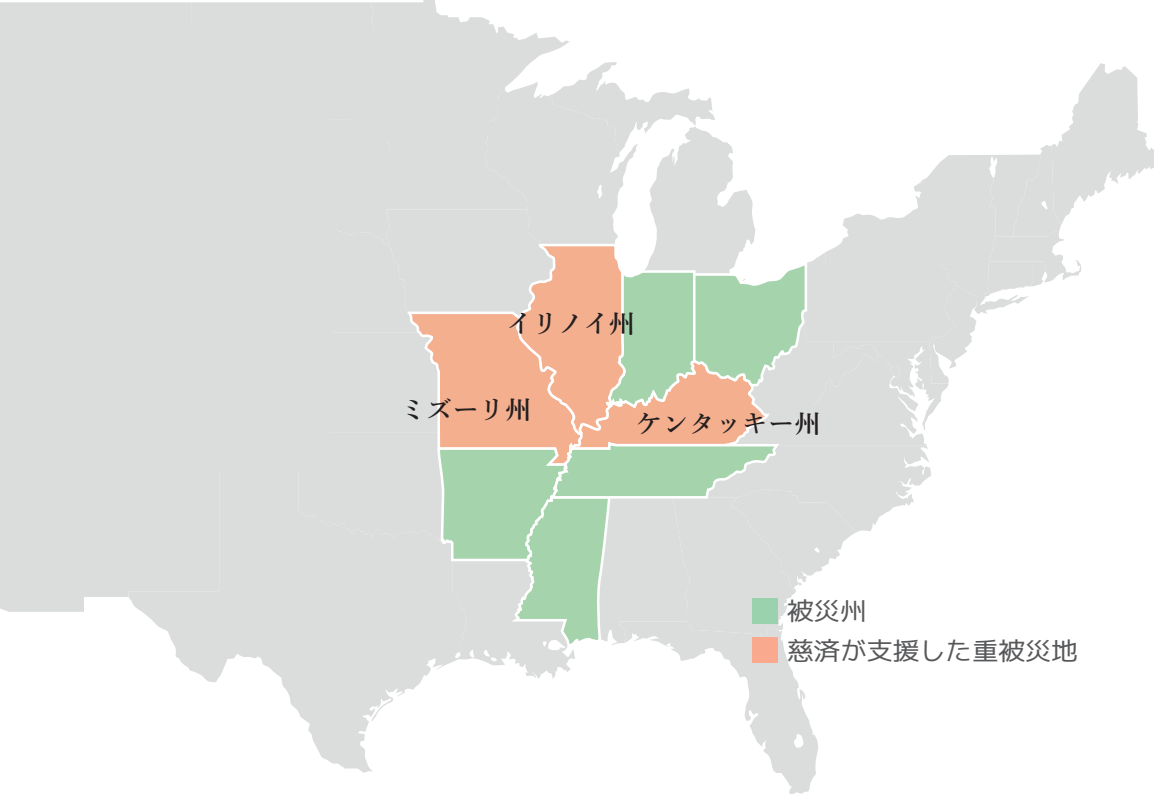
●ケンタッキー州ボーリンググリーン市にある住宅街は、僅か数時間のうちに竜巻によって家屋が半分にちぎられ、残骸が散乱していた。



二十以上の猛烈な冬の竜巻が、
二〇二二年十二月十日から十一日
にかけて、アメリカ中部と南部を次々
に直撃し、その悪天候がもたらした災
害により街は壊滅的な打撃を受けた。そ
の内の一つは三百二十キロメートル以上
を走り、ケンタッキー州の人口が密集し
た都市を横切った。多くの住民は、竜
巻の警報サイレンが鳴るのを聞いても
避難が間に合わず、子供を抱きしめてう
ずくまるしかなかったことを思い起し
た。メイフィールド市に住んでいるデ
イステイン・ホマスさんは、「クレイジー」
という言葉で、被災後の様子を形容し

た。「住民の中には家を無くし、仕事場
も無くし、命まで落とした人もいます。
私の住んでいる所にこのようなことが
起こるとは、今まで思ってもみません
でした」。

アメリカ中西部では、竜巻といえ
ば四月から五月にかけて発生すること
が多く、十二月にこのように凶暴な竜
巻が発生するなど滅多にないことである。
被害の大きかった地区では建物が倒
壊し、火災が発生して多くの人が亡く
なった。慈済は連邦緊急事態管理庁（F
EMA）及び赤十字社と協力して、三
つの州で配付支援活動を展開し、全壊



【被災地支援概要】 中南部の竜巻災害

- ・ 2021年クリスマス前に6回の配付を行った
- ・ 総計455世帯、1,543人が恩恵を受けた
- ・ 一世帯あたり：千ドル分のプリペイドカード、
エコ毛布、マフラー、帽子、
歯ブラシなどの生活用品。

”住民の中には家を無くし、仕事場も無くし、命まで落とした人もいます。私の住んでいる所にこのようなことが起こるとは、今まで思ってもみませんでした……”

メイフィールド市民 デイステイン・ホマスさん

亡き人を共に偲ぶ

稀に見る冬の竜巻が八つの州を直撃し、シカゴの慈済ボランティアチームは早急に甚大な被害を被った地区に駆けつけて被害状況を調査し、クリスマス前に支援ができるよう急いだ。甚大な被害を受けたケンタッキー州のメイフィールド市では、建物の瓦礫の前で幸いにも生き残った人たちが亡くなった肉親に花束と写真を捧げていた。慈済ボランティアも

犠牲者の冥福を敬虔に祈った。（写真1 撮影・李侑達）
発生後は気温が急激に下がり、何もかも失った被災者たちは同時に停電という苦境に陥ったので、慈済ボランティアは赤十字社と協力して、六回の配付活動を行った。メイフィールド市の配付会場では、住民が竜巻来襲の恐怖と無力感を思い出していた。（写真2）



ボランティアは被災者が遭遇した恐怖に耳を傾け、心の痛みを慰めた。涙を拭くと住民は、愛と善の循環でより多くの人を助けられるよう、愛の募金を竹筒貯金箱に入れた。(写真3)。



慈済から千ドルの現金カードと支援物資の入ったバッグを受け取り、多少とも被災後の生活は落ち着いた。(写真4)



した四百五十五世帯と深刻な被害にまわられた世帯に、一世帯当たりの緊急支援として千ドル分のプリペイドカードと支援物資の入ったバッグを贈った。気丈に災害に立ち向かうメイフィールド市のキャシー・オーナン市長は、初めて会った慈済ボランティアの前でポロポロと涙をこぼした。「ここ数日のインタビューや会議では感情が昂らないようにして、毎日泣いてはいけないと自分に言い聞かせていました。皆さんの団体が市民に物資を届けてくれると聞いて、特にお見舞金まであるとは信じ

られませんでしたが、今私は本当に感謝です」と語った。

気温が摂氏零度を下回り、慈済の配付は時間との競争になった。ミシガン州、インディアナ州、オハイオ州、ミズーリ州、ウィスコンシン州、イリノイ州のボランティアは協力しあって任務を成し遂げた。最後の配付活動も十二月二十四日に円満に終了し、各州から来たボランティアはホテルでクリスマススイブを過ごし、家族との団欒の時間を犠牲にしてまで、被災者に温かい祝福を届けたのである。(慈済月刊六六三期より)



◎訳・慈願
絵・陳九熹

人々の心に愛があれば、 人助けをすることが出来る

足ることを知り、常に楽しければ、生命はとても豊かになります。

しかし、一人で善行するだけでは足りず、

生命の教育を始めなければなりません。

一人ひとりの良知良能を啓発すれば、人助けのできない人はいません。

世

界では依然としてコロナ禍が深刻で、新たな変異株がまた一波、

拡散しています。皆さんも敬虔に戒を護り、心を一つにして世の中の平安を祈り、謙虚な心で新型コロナの「大いなる教育」を受け止めなければいけません。

以前によくこう言いました。世を脅かす災難が差し迫った時、人は皆、世

に警告を発する覚悟を持ち、欲念に溺れていてはなりません。と。多くの人は、自分は無欲無念で、悪業を造っていないと思っているでしょう。しかし、

欲念は心の奥に潜んでおり、気が付かないほど微細で、境地に伴って頭をもたげるのです。もし、誰もがそのような心で行動を起こしたなら、造られた業力は長年にわたって蓄積されて、「衆

生の共業」となり、大半の人に影響を及ぼすほどの大災難になるのです。

心に起きた念は僅かなものでも軽んじてはなりません。自分の小愛や私心から差別の気持ちを抱いてしまう凡夫のように、愛する人、事、物に対しては格別に関心を寄せ、自分とは関係がないと思うことには全く気にかけなかったり、或いは嫌いだからといった憎悪から特定の人、事、物を排除するようになります。いつも気がつかないうちに煩惱を溜めてしまい、その煩惱に伴って行動することで業力を積み上げてしまうのです。欲念によって造り

出された環境破壊と汚染は、気候変動をもたらし、多くの国と地域で異常気象による災害が発生しています。

天下の平穏と、人々が以前のように健康で自由であるよう願うならば、その妙薬は自らが目覚めることです。人としての規律、齋戒、菜食、戒律を守るのです。私たちが万物の生命を愛惜して肉さえ食さなければ、動物は私たちの口の欲のために屠殺されることはなくなります。全ての衆生が安泰に暮らせるようになれば、人間（じんかん）は吉祥に満ちるでしょう。

いまだコロナ禍は過ぎておらず、入

国者は検疫のための隔離や自主健康管理が必要なことから、台湾への訪問を控えている人が少なくありません。今年の春節が以前と違っていたのは、人と人の距離が保たれていても、情は濃く、心と心はとても近くにありました。現実の地理的な距離は何千キロも離れていても、科学技術が発達していますから、オンラインですぐにつながることでできます。春節の間、応接室に座ったままで世界を旅することができ、慈済の大家族が共に、温かい新年の雰囲気に含まれていました。

師弟間はお互いに心がつながって

おり、同門者は同じ心と志で菩薩道を歩んでいます。この法髓の情は清浄無私の大愛であり、この深い情は遠く広く続けていくことができます。モザンビークのボランティアと精舎の会議と新年の挨拶はオンラインで行われましたが、師父を敬い愛している誠意のある供養を感じることができました。テーブル一つ、椅子一つ、カップ一つにしても、置かれた様子に心温まるものが感じられました。また、私の席の前にある世界地図を模倣して、テーブルの上に砂絵の地図を描き、石を並べて国境にし、花びらが慈済の連絡所を表し

ており、とても感心しました。

彼らには煩惱がなく、智慧が人間（じんかん）の物欲を超越しています。生活の貧しさが彼らの障害になることはありません。慈済の道場は天をもつて屋根とし、地面に座り、心はこのように広々としています。

足ることを知って、生命はとても豊かなのです。ただ、自分の身だけを清め、自分一人で善行するだけでは足りません。自分の生活を安定させた上で、人々の生活をも安定させ、心身の糧を分かち合い、生命教育を展開して、人々の良知良能を啓発するのです。人助け

のできない人はいません。誰もが人助けができる人になれるのです。

慈済の竹筒歲月は三十名の会員から始まり、「五十銭」が積み重なって、近頃から遠くへ、少しずつ世界に広がり、菩薩たちは数十カ国に至りました。どんな災害や苦難が起こっても、自分一人の愛でも欠けてはならないという暗黙の了解の下に、世の中の苦難にある人を助けています。

苦しんでいる人がいるから、心と願と力のある人は奉仕する機会があり、眼の前にどんな困難が立ちはだかつていても、菩薩道を成就させることができ

きるのです。ですから、人を助ける場合、助ける対象に対して尊敬の念を持って感謝すべきですし、助けられた人はその恩を忘れてはいけません。お互いに恩人になり、お互いに感謝することが、人間（じんかん）で最も美しい境地なのです。全ての人が楽しく暮らすことができますようになり、五濁の悪世が極楽世界に変わります。

この世に来ることができた自分の今生を大切にし、さらに自分の生命がこの世で役に立っていると認めましょう。近頃いつも、皆で自分の生命のたな卸しをするよう呼びかけていますが、世

の中に奉仕する生活が価値のある人生なのです。私も自分の人生はとても価値があると思っています。その価値は、世の中にこれほど多くの人が私と心を一つに同じ方向を歩んできたことにあります。毎回慈済人はオンラインの会が終わると「生生世世師に追従します」と発願しますが、私も彼らにこう言います。共にその心願を抱いてこの大道を力強く進み、広く衆生が菩薩になるよう悟りに導き、生生世世、連綿と菩薩道を受け継いでいきましょう。皆さんの精進を願っております。

（慈済月刊六六四期より）

ソフィアンの 成功創業記

五回も台湾の花蓮慈濟病院で腫瘍の治療を受けたことがあるソフィアンさんは、今ではすでに家庭を持つて独立している。妻の支持のもとに、視覚障害者向けのコンピューター塾を開き、専門知識を生かして人のために希望の明かりを灯している。

◎文・撮影・Khusni Khotimah
(インドネシア「慈濟世界」記者)
中訳・陳龍仔
(慈濟インドネシア支部翻訳チームメンバー)
和訳・葉美娥



「これは視覚障害者たちが普段使っているスクリーンリーダープログラムです。もし二〇二一年ポケット版のダウンロード方法を知りたければ、動画を最後までご覧ください」。ソフィアンさんは、自ら開設したチャンネルに動画をアップロードする準備をしていた。

テーマの絞り込みから、録音、録画、テロップ入れ、動画のアップロードまで、ほとんど目の見えない彼が如何にして一人で完成させたのか、想像し難い。彼が運営している「Dunia Netra（視覚障害者の世界）」というチャンネルは、今年一月に運営を始め、八カ月で二千百人を超えるフォロワーがいる。実に素晴らしい。

●自分のYouTubeチャンネルの動画を更新するソフィアンさん。今年1月に運営を始めたが、既に2千人余りのフォロワーがいる。

視覚障害者にパソコンを教える

ソフィアンさんは幼児期に「線維性骨異形成症」を患い、右の顔面にできた十五センチの大きな腫瘍に圧迫されて、右眼が酷く突出し、両眼とも視力に影響が出た。十五歳の時、インドネシアの慈濟ボランティアが施療の際に彼の病気を発見し、二〇〇五年から多数回にわたって、台湾の花蓮慈濟病院で治療することを支援した。

ソフィアンさんは僅かな視力しかなく

でも、勉強が好きで、自分の潜在能力を探り続け、努力によって自立した生活ができることを望んだ。今年三十四歳になるが、かつては銀行のセールスマン、国営の海運会社の仕事、小さな商売をしたこともあった。

北ジャカルタに住んでいた時は、南ジャカルタのミトラネトラ盲人基金会で学習するために、何回もバスを乗り継がなければならなかったが、堅持し続けた。「パソコンが使えるようになれば、仕事を見つけ、大学に行くこともできるのです。私が学んだ知識は視覚障害者にとって非常に重要なもので、彼らにも学習の場を提供しようと考えています」。

ように、いなくなってしまうました。急に暇な時間が多くなったので、何をしたらいいかを考えています」と彼は笑って言った。

彼はネット教室を試み、インドネシア政府通信部 (Kominfo) の協力プロジェクトを通じて、インドネシア東部、スマトラ島、バリ島の視覚障害者が受講できるようにになった。オンラインで授業する時、学生たちが既に彼のことを知っていると気がついた。学生は皆、ソフィアさんのユーチューブチャンネルのフォローだったのだ。

ソフィアさんは最初、ユーチューブチャンネルを使って授業データを保存す

二〇一八年、ジャカルタにあるインドラプラスタ PGRI 大学 (Universitas Indraprasta) の心理カウンセリング学科を卒業したソフィアさんは、チェカレン慈済大愛一村で視覚障害者のためのパソコン教室、「希望の灯」を立ち上げ、視覚障害者用パソコンで各種文書ソフトの使い方を教えている。希望者がとても多いので、幼稚園、小学校、中学校のクラスも増やし、妻のアナワティーさんも授業を手伝っている。

昨年、新型コロナウイルス感染症が出現すると、塾の学生数が急減し、元来五十名いたクラスが、今は五名しか残っていない。「パラシュートで飛び降りた

るだけのつもりだったが、思いも寄らず、アップロードした動画に対して多くの好評を得た。今では定期的に受講する人が十人いる。中部ジャワ州のペカロンガン市に住むファイジンさんは、スプレッドシートの作成を勉強している。「ソフィア先生は分かりやすい言葉で説明してくれるので、楽しく面白く授業を受けています。私たちは時には話をしたり笑ったりしています」。

障害とは実は踏み台

ソフィアさんの精神力には感服させられる。幼少期、両親は彼のために財産

をはたいて積極的に病院に連れて行き、二回手術したが、病気はなかなか好転しなかった。台湾で治療を受けるチャンスもあったが、言葉が通じないという悩みと心配もあった。腫瘍が再発する度に手術を受け、視力は回復したが、また次第に失われていった。辛い経験をしてきた彼は、「私は見えませんが、周りの人の愛は感じます」と言った。彼は夢を捨てなかった。いつの日にか専門知識でもって人助けをしたい。

「私には座右の銘があります。体の障害をつまずく石ではなく、明るい未来へのかけ橋になる踏み台にするのです」。彼は自分の座右の銘が他の心身障害者の



●ソフィアンさんは視覚障害者のためにパソコン教室を経営している。妻もよく授業を手伝っている。

励ましにもなることを期待している。今、自分の現状を受け入れることがとても大切で、心を調整してこそ、新しい生活を平穩に暮らすことができるのだ、と言った。

常に寄り添ってくれているボランティアの梁国瑞(リヤン・グオルイ)さんは、ソフィアンさんの前向きな考えと、学習し続ける精神を大いに褒めている。「ソフィアンさんは本当に立派です。もっと多くの若者が彼と同じような向上心を持てば、インドネシアは一層繁栄し、進歩すると信じています」。

ソフィアンさんは、慈済と證嚴法師が彼と家族に対して良くしてくれたことを永遠に心に銘記している、とボランティア

アに語った。彼は十五歳から十一年間に何度も台湾へ来て、花蓮慈濟病院で手術を受けた。ボランティアは今に至っても家族のように親切に寄り添ってくれている。「信念を強く持つようと生前の父に励まされました。多くの人が支えてくれているから、自分の可能性を証明したいのです」。

ソフィアンさんは、證嚴法師に会ってとても感動した年のことを振り返った。「證嚴法師は『あなたに見える世界は真っ暗闇かもしれませんが、心を明るく保たなければいけません』と諭されました。私はその言葉を永遠に心に銘記しています」。(慈済月刊六六〇期より)

台湾南投

心がすっきりする初めの一步

◎文・陳雪玉（南投慈濟ボランティア）
撮影・陳秋燕（南投慈濟ボランティア）
訳・御山凛

この一戸建てには、一階から三階まで雑多な物とゴミがいつぱい積み上げられていた。リビング、キッチン、トイレ、部屋がほとんど足の踏み場もないほどだった。邦さんはどうやって日常生活を送っているのだろうか？五十数人のボランティアは、考えることもなく、隙間から入って清掃を始めた。一回目に中に入ったメン



ミャンマー

物価上昇 川を渡って 米を届ける支援

ヤンゴン市に近い、ヤンゴン川兩岸を
跨ぐチミンダイン地区の住民は、毎日川
を渡ってヤンゴン市海鮮市場に行き、運
搬や工業区での仕事をしている。その日、
二十一艘の小船が、列をなして二千袋の
米と食用油を対岸に運んだ。それらは住
民が首を長くして待ちのぞんでいたもの
だった。



◎文・黄露尧（慈済ミャンマー連絡処職員） 訳・御山凛
撮影・ミン・トウ（ミャンマー慈青）



バーには耐えきれず外へ飛び出して吐い
てしまった人もいたが、他の人は怯むこ
となく清掃を続けた。
クレジットカードの支払い滞納と失業
で家が差し押さえられたが、幸いにも
姉が家を買戻してくれた。しかし、そ
の時から物を溜めるようになった。廃棄
物を拾う生活では三食を満たすことはで
きず、慈済が生活を補助し、またリサイ
クルステーションに連れて行って回収物
の分別をさせると共に、食事を与えた。
二〇二一年十一月に二度目の清掃をした
時、台中慈済病院の医療人員は邦さんの
心身検査を勧め、ボランティアも邦さん
に、「旧正月前にまた見に来ます。家を清
潔なままに保っていてくださいね！」と
念を押した。



ミャンマーのコロナ禍は次第に落ち着いて来ていたが、いくつかの村は未だ通行止めになっており、工場は大量雇用の見通しが立っていないかった。ボランティアは救済措置として配付活動を継続し、十月にはチミンダイン地区で八千三百余りの生活困窮世帯に物資を届けた。住民は老若男女を問わず、自主的に米を配付地点まで運ぶ手伝いをした。住民のチョー・ミン・ナインさんは、毎日未明の三時半に川を渡って、市場で運搬工として働いている。「コロナ禍で物価が上がり、生活は厳しくなりましたが、慈済からお米をいただくことができ、とても感謝しています。ですから、お米を運ぶのは、ちっとも大変ではありません！」と言った。



フィリピン

◎資料の提供・慈済フィリピン支部 訳・御山凛

医療スタッフが私に微笑んだ

六十三歳のリアさん（写真中央）は、フィリピン慈済眼科センターで左目の白内障手術を受けて、やっと物がはっきり見えるようになった。彼女は嬉しくて仕方がなく、医師への感謝を抑えきれなかった。

マニラの慈済志業パーク（慈済の施設が集まった場所）にある慈済眼科センターは十四年間、病院に見放された貧困層の患者のために、無料で診察を続



撮影・李佳美

インドネシア

洪水に阻まれた街 万を数える 世帯を支援

◎文、写真・慈済インドネシア支部
訳・御山凛

二〇二一年十月末、インドネシアは雨季が始まり、多くの州で驚くべき雨量を記録した。西カリマンタン州のシンタン県、メラウイ県等は、浸水して一カ月以上経っても水が引かず、交通が中断したまま、全州八万を超える人が被災した。



けてきた。慈済人医会メンバーは奉仕を信条としており、コロナ禍でも手術は継続して行われ、二〇二一年通年の手術回数はコロナ禍前と同等だった。一般的な麻酔手術は、本来なら近隣の二つの病院が協力して行っていたが、厳しさを増したコロナ禍では、作業の申請が複雑になっていた。そんな中、麻酔医師の陳少青（チェン・サオチン）さんは、慈済が手術室を借りる費用の節約ができるよう、自主的に慈済眼科センターに来て、患者のために麻酔を施した。

（写真上 提供・慈済フィリピン支部）



多くの住民は家に閉じ込められ、早急に薬とベビー用品、生活物資の支援が必要になっていた。

十一月上旬から、ジャカルタ、カリマンタン各地区の慈済ボランティアは、軍や警察の協力の下に、船による配付を行い、浸水した地域の被災世帯に米と即席麺、食用油などを届けると共に、避難所に食糧と日用品を提供した。水が引いた後も、軍の協力で各村落で継続して配付活動を行い、合計約二万四千世帯を支援した。（慈済月刊六六二期より）



上の子に成りたくない

問

いつもパパやママが、あなたは一番大きいのだから、弟や妹の手本になるようにと言うのです。でも、それでは私が疲れてしまいます。

答：私個人としては、上の子は苦勞とやるせなさが付きまとうことを深く理解しています。特に両親がいつも、「あなたは一番上なんだから、弟と争わず、面倒を見てあげなさい」、「妹はまだ分らないのよ。あなたはお姉さんなのにそれではダメでしょ！」このような言い方

では、上の子は無意識のうちにストレスが増えるばかりで、無力感さえ漂うようになり、両親はえこひいきだと感じるため、子供にとって不公平なのです！
どうすれば、上の子が楽しく過ごせ、ストレスを減らし、悩みをなくすことができるでしょうか。

親へのアドバイス

平等な扱い：子供が喧嘩したりおもちゃを奪い合ったりした時、理由を問わず、直ぐに上の子を叱ったりすれば、二番目や三番目の子は尊重することを学ぶことはできません。

子供が幼い時、同じ性別であれば、おもちゃや洋服などは、比較する気持ちを起こさないために、同じものを買うのが最善です。性別が異なる場合は、買う前に子供たちに欲しいものを選ばせれば、おもちゃや洋服の取り合いで喧嘩するようないことはなくなり、平等に対応するこ

とで、兄弟同士が尊重し合うことを学ぶようになります。

新しい家族が増えた時には、先ず上の子に伝えることです。二番目の子供を妊娠した時、上の子に受け入れてもらうために、妊娠した時から新しい弟や妹がこの家に誕生することを伝えましょう。胎児が動いた時にお腹を触らせて、小さな赤ちゃんの存在を感じさせてあげるので。赤ちゃんが生まれたら、オムツの取り換えや哺乳瓶を渡す手伝いをしてもらうと、無意識のうちに新しい家族メンバーを受け入れるようになります。そうすれば、自分が取って代わられるという

心配はなくなります。

そして、**上の子が成長したからと言って、構わなくなるのはいいけません。**一番好ましい家庭教育とは、上の子が孤立しないように、週に一回、その子と単独で食事やおやつを食べたり、買い物に行ったり、内緒話をするのです。一緒に過ごす時間は長さよりも内容の濃さが大切です。ですから、一時間程度でも十分です。そうすれば、上の子は弟や妹をもっと愛するようになります。

もし、週に一回も時間が作れない場合は、少なくとも月に一回は実行すれば、

上の子はそういう時間をとても大切にすることはです。それによって親子関係はより親密になり、兄弟関係ももっと良くなります。

日頃から上の子を褒めたり励ましたりしましょう。人の目は、見栄えの良い人や事、物に自然に引き付けられるようになっていきます。日常から、親は注意して子供たちの特徴や長所を見つけ、子供たちが揃った時に、友人が特定の一人だけを褒めたとしたら、親が率先して友人に「褒めてくれてありがとうございます。うちの上の子は歯並びがとても綺麗で、

笑うと魅力的で、話上手なの」と言いましょう。自分の親からそんな褒め言葉を聞くと、上の子

はその場では嬉しくなつて笑わなくても、心の中では笑顔で喜んでいること間違いなしです！

上の子へのアドバイス

両親に「上の子なのだから…」という言い方が本当に嫌だと正直に伝え、そして適切な時間を選んで、自分の本当の気持ちを表すようにしましょう。

但し、「妹がパパやママの愛を独り占めにした」、「あいつは嫌い」、「上の子になりたくない」



と言うのはいけません。代わりに「弟がとても好きだ。でも、どうすればお兄さんになれるかは、少しずつ学んで行くから。プレッシャーをかけないでね」と伝えましょう。親はあなたの告白を聞いて自分たちも気づくはずで、あなたへの態度も変わるはずです。



結局、子供は子供であり、誰も上の子として生まれてくる人はいないので。親も生まれつきパパやママになれる訳ではありません。上の子の立場を思いやることを忘れないでください。そして、親が永遠に愛していることを知ってもらいま

しょう。日頃から親は下の子に上の子の手伝いをさせる機会をすることで、兄弟姉妹はいがみ合ったり、競争するのではなく、「互いに面倒を見る」べきだと分ってもらうのです。

「上の子は親の後ろ姿を見て育ち、二番目の子は上の子の後ろ姿を見て育つ」と言われます。上の子と下の子を仲良くさせるのは知恵の使いどころであり、芸術でさえあるのです。親としてそれを重視する必要があります。そうすれば、子供たちは将来、仲良くなり、兄弟姉妹の間にトラブルはなくなります！

（慈濟月刊六五〇期より）

謝ることはそんなに難しいの？

問

子供は結局ごめんなさいと言えないのでしょうか。それとも自分の過ちを理解していないのでしょうか。

答・過失にしろ故意にしろ、誰でも過ちを犯すものです。過ちを犯した時に謝るのは美德です。謝罪は深く反省した後に、心の底から出た、改心するという懺悔です。子供は成長過程で、過

ちを犯すのは避けられません。素早く過ちに気づいて謝る子供も居れば、簡単には認めない子供も居ます。一体どんな原因で子供が謝らないのでしょうか。

親が模範行為を示していない

家は子供の最初の学校と言えます。親でも過ちを犯すものです。その時、必ずごめんなさいと言わなければなりません。何事も無かったかのような態度を取らないことです。親が模範行動を示さなければ、それを見ている子供は過ちを犯した時、同じように、様々な言い訳で過ちを隠そうとします。

ですから、親が良い手本になって、子供に過ちを犯した時に謝するという正直さを学ばせてください。将来、団体の中で共同生活の規則が守れないような影響が

出てはいけません。

子供は罰せられることを怖がる

子供が過ちを犯した時、急いで子供に過ちを認めさせる親がいますが、脅したり叱ったりする親もいます。また、子供が過ちを認めても親から理解が得られず、逆に叱られてしまうと、次回からは罰せられることを避けるようになります。そういうことにならないように、親は心を静めて原因を理解することです。まず、追咎したり痛癢を起こしたりしてはならず、柔和な口調で子供の過ちを指

摘し、子供が愛と関心を感じるようになれば、拒絶することもなく、勇気を持って認めることができるようになります。

正直に謝るという社会の気風

最近、ある新聞記事が印象に残りました。ある子供がレストランで食事をした時、こっそりトイレクリーナーを化粧室にあった魚の水槽に入れたため、魚は全部死んでしまいました。店のオーナーは悲しみと怒りで、声明文を出し、死んだ魚の写真と事件の全容がネットで広が



りました。ある母親はそれを見て、自分の子供がやったのではないかと思い、問い詰めたところ、子供は悲しくなって認めました。面白遊び半分でやったが、魚が死ぬとは思っていなかった。その後、親子は店に行って正直に話し、丁寧に謝ったため、店のオーナーに許して貰えました。

この心温まる誠実な事件がマスコミに報道されると、賛美の声が一斉に上がった。私たちのニュースやメディアにこのような実例がたくさん報道されれば、子供は謝ることでポジティブな反応が得られることを知るでしょう。しかしもし、

社会全体が真心で過ちを認める気風がなければ、弁解するだけ得をし、子供たちが見聞きするうちに悪い影響を受け、弁解することを身につけてしまうでしょう。

自尊心を守るために

子供が次第に成長し、青春期に入ると益々、同年代の人からの視線を気にするようになり、多分、面子の為に、過ちを隠せるだけ隠し、結果は後で考えるようになります。特に過ちが兄弟や同級生との間に発生した時、個人的な自尊心を守る為に一層、隠しがります。

以前、クラスのある男子生徒が鼻くそを丸めて女子生徒に向かって弾くという遊びをしていました。女子生徒は私のところに訴えてきました。私はその男子

期待して、鼻くそ事件はそれで幕を閉じました。

生徒を呼んで事情を聞くと、彼は「女子たちは僕に偏見を持っていて、僕に濡れ衣を着せているのです。その鼻くそが僕のものだという証拠があるのですか」と言いました。しかし、三人もの生徒が、彼が鼻くそを弾いた時間と授業科目をはっきり指摘したので、彼は弁解を止めました。私は彼の自尊心を守るために、謝らせることはしませんでしたが、そのような行為を止めるようにと

静思語：「人は誰もが良知を持っています。現実に立ち向かう勇氣を持って、懺悔と反省をすれば、自らの過ちに気づくでしょう」。私たちが子供に何の過ちを犯したかを指摘する時、子供は内心、既に過ちに気づいているはずです。その後、置くべき重点は、如何にして過ちを正すかで、謝るだけではありません。深く反省し、改めることができれば、謝るのはただの形式に過ぎません。親として形式にこだわる必要はないのです。

（慈済月刊六五二期より）

人生を以て人生を記録する

時代の証を立て、慈済の歴史を残し、社會の模範を打ち立てた、全ての「人文真善美」のボランティアに感謝したい。

皆で力を合わせて完成させた作品は、わたしたちの命より長く引き継がれ、

いつの世でも、あの時、あの地、あの人の証となって、

かつてあった刹那の感動を与えてくれるだろう。

初

めて慈済ボランティアが収録した

映像を目にした時、私は泣いてし

まった！あの映像は全く「化粧していない

素肌」のように揺れ動き、声音も途切れ

途切れだった。テレビ番組のプロデュ―

サーの目から見れば、恐らく使える代物

ではなかった。しかし、あの映像は、ボ

ランティアが災害現場に奥深く入り、苦

難に見舞われた人々に寄り添って記録し

たものである。

映像の中から、被災者が記録した人か

は分からないが、嗚咽の音が聞こえた。

画面から、人々が互いに抱き合って湯気

が立ち込め、レンズが曇っていたのが分

かった。映像を見ていた時、グッと来る

のを感じ、そのセリフのないビデオテー

プが心の中の軟らかい部分を揺り動か

した。後で、それは「慈悲」なのだと分

かった。そして、これらを記録した人た

ちに共通する名称があることも初めて

知った：「人文真善美ボランティア」。

私と真善美ボランティアの関係を表す

一番良い名称は、「同級生」或いは「同

門生」であろう。二〇〇三年に慈済基金

会に就職した時、私はただの「慈済の人

間」に過ぎず、慈済については半分も理

解していなかった。その年、私が担当し

たのは、「文化三合一ボランティア」の発

展と人員の養成だった。慈済のことをよ

く理解していなかったその頃、経験豊富

な「文化三合一ボランティア」たちが手引

をし、いろはの先生となって仏教儀式、慈

済精神、コミュニティ運営及びボランティ

アの生態などを教えてくれた。私は数年

間の番組制作に関わった経験を代わりに

分かち合った。プロの撮影方法、カッ

ティングテクニク、題材の選び方と取

材、プロジェクトの企画経験などである。

ここ数年間、真善美ボランティアに益々、多くのことを教えられ、彼らの名称も「文化三合一」から「人文真善美」に改められた。私たちはずっと一緒に成長し、私の専門で教えられることがなくなった時、プロの先生を招いて講義を受け持ってもらったが、彼らはいつも素早く学び取った。そして、私が提供できるのが専門知識ではなく、慧命の分かち合いになった時、そして、私も彼らのような人間になりたいと思った故に、養成コースに参加し始め、慈済委員の認証を受けた。

私は、慈済で人文記録に携わっている

多くの職員やボランティアは、慈済精神に心を動かされ、一つまた一つと取材を重ねて、自分の生命で生命の記録をしているのだと思う。私たちと記録に残る人の間では、互いに話を傾けることで力となった。私たちは彼らの身の上から一部を取り上げて、答えを見つけないでなく、慰め合い、目の前の苦境を切り抜けて来た。いつも互いを思いやり、共感を持つことで、時代の真、善、美の証人となり、私たちのチームを成長させて来た。

生命には終わりがあがるが、慧命は窮まるところを知らない。時代の証を立て、



『真実を語る人』

01 真実の人生を拝見
02 善の力を自分の目で確かめる

慈済の歴史を残し、社会の模範を打ち立ててくれた、全ての「人文真善美」ボランティアに感謝したい。私も、皆が力を合わせて作った作品は、私たちの命より長く引き継がれ、いつまでも、あの時、あの地、あの人の証となって、かつてあった利那の感動を与えてくれると信じている。

謹んで、この本で以て歴史を記録した人に感謝したい。彼らの姿も慈済の歴史の一部であり、彼らは万難を排して使命を果たすことで、人間仏教に欠かせない大切な部分を書きあげたのである。

『真実を語る人』の序文より

(慈済月刊六五三期より)

福を積み、造る

◎文・釋徳侃／訳・済運

人間（じんかん）では、利益を得たなら、それ以上に社会に幸せをもたらして福の因と縁を途絶えさせないことです。

心が軽やかになる秘訣

上人は、北部の第十三回目の認証式兼歳末祝福会で、皆に人生の価値を「棚卸し」して、人間（じんかん）を利したかどうか、それともボーッとして無駄に過ごして来たかを振り返るように、と言いました。生命を無駄に過ごすことは人生の価値を失うことでもあります。力があれば、奉仕に努めるべきであり、この世を氣遣わな

ればなりません。

「私たちは家庭を守り、事業に専念し、社会を利するような真つかな事をすべきです。また、一步踏み込んで、事業で得た利益を社会に還元してこそ、お金儲けに本当の価値が現れるのです」。また上人は、人間（じんかん）に來たのは滅多にない縁であるから、生命の良能を發揮して奉仕すべきであり、この世を利すると共に、社会に福をもたらさなければならぬ、と言いました。

「この人生で事業に努め、お金儲けできるのは、過去生で福の因を作ったことによるのであり、今生では人と縁が結ばれ、選択によって、成したことが正しければ、お金が儲ります。これを『時應運』（機運に乗じる）または『運應時』（時勢に乗じる）」と呼び、時と生命と運命のどれ一つが欠けても成り立ちません。適時に運命に沿えば、過去に植えた福の因によって福が積み重なります。過去に植えた木の



種類に従って、それ相応の種子が実り、今この時にこの土地に落ちて日光や空気、水分が得られるのです。そこで因縁と適時の命運によって芽が出て、適時に人間（じんかん）に福をもたらすようになります。そこに人生の価値があるのです。福の因、福の縁があつて初めて福を造ることができるのですから、時間を無駄にせず、善の種子を蒔きましょう」。

上人が軽やかな心境を保つ秘訣を語りました。つまり、毎日起きた時に手足を動かし、自由自在に動かせるならば、先ず「感謝」の気持ちが出てきます。昨夜を無事に過ごし、今日も健康に仕事ができることへの感謝です。今日の方向からはぐれず、自分がすべきことをし、仏や法に接し、頂礼（ちようらい）して仏法を敬い、仏の教育に従うのです。自分の部屋を出て、本堂に向かう時、普通はまだ夜が明けていません。その時、明月を空に見ることもあり、月の

満ち欠けを見ながら、時の流れを感じます。人生も世事も無常で、あらゆる物事は時間と共に変化していくため、一刻一刻が平安であることに感謝しなければなりません。

「一日の計は夜明けにあり。毎日朝早く起きた後。心をちゃんと整理するのです。昨日または以前に思う通りにいかなかったことがあつても、それを忘れ、今日も新しい一日が始まり、温かくて明るい朝の光が心の中を照らすようにするのです」。また上人は、「晨語を開示する前はまだ夜が明けていませんが、開示が終わって本堂を出る時は既に、太陽が海面上に顔を出しており、赤みがかった黄色の太陽を見ることが出来ます。その時の光はまだ眩しいものではなく、朝日が山肌や大地を照らし、とても美しい景観を創り出します。それ故、毎日とても満足な気持ちになり、自分は幸福だと感じます。年月が過ぎて歳をとったと感じ、山の向こうに日が沈みかけているも

の、それでも時間を無駄にしないよう、自分を励ましています」。

「行脚で移動する際に、車で北から南に向かって海岸線を走っていると、太陽が海の向こうに沈むのを目にすることがあります。その時、私は太陽がいつ完全に沈むのかを注視します。しかし、どんなに注意していても、家に遮られた後、再び海が見えた時、太陽は既に沈んでしまっており、日没はこんなにも速いのかという感じを受けます。ですから、常に太陽の位置に注意していれば、移動している感じがしません。ちよつとでも注意を逸らすと、海面に沈んでしまうのです。その実、人生も同じようなもので、毎日が平安に過ぎて行くことに感謝すべきであり、今を逃さず、未来のために道を切り開くべきです」。

上人は大衆をこう励ましました。「人生は無常で短いものですが、この人生と一個人の力を軽く見てはいけません。小さい蟻は弱くても、方向さえ定まれば、精進して前に進み、何代にもわたってその

志は変わらず、最後には須弥山を超えることさえできるのです。慈済人は小さな蟻のように、この五十数年間、こまごました力を結集して四大志業と八大法印を成就させ、人間（じんかん）を利してきました」。

慈済人はまた、淡い光を放つ蛍のようです。数多くの蛍が集まれば、暗い夜は美しいものになります。「自分を大きく見せようとすれば、傲慢になりますが、そうかと言って卑下し、自分を軽く見てもいけません。それは、私たちも生命を使って暗闇を照らす光を放つことができるからです」。また、『前人が木を植え、後人が涼を取る』と言うように、前人が繁栄する社会の基礎を打ち立ててくれたことに感謝し、今の人がそれを心して繁栄を持続させ、更に次世代にバトンタッチして行くのです。若い人も感謝し、絶えず感謝の気持ちの中で循環する世界を造らなければいけません。（慈済月刊六六三期より）

三月の出来事・・・・・・・・・・・・・・・・

訳・済運

03・01	ロシアとウクライナの間で戦争が勃発し、100万人以上のウクライナ難民がポーランドやスロバキアなどの隣国に避難した。慈済基金会は積極的に支援ルートを探した。また、1日から愛を募る募金活動を開始し、集まった募金は「共に大愛で善行し、苦難の人を助ける」プロジェクト口座に入れられる。ポーランドのボランティアが現地で物資を購入する他、各地から集まった米や麵、缶詰などの食糧および日用品は5日、ポズナン近郊にある政府が用意した場所に送られ、配付が行われた。また、19日にはポズナンの聖エリザベス教会所属の希望の家 (House Of Hope) にも送られ、そこに避難
-------	--

03・02	第5回国連環境総会 (UNEA) はコロナ禍のため、2段階に分かれて催された。先ず2021年2月にオンラインで行われ、次に今年の2月28日から3月4日までケニアで開催された。慈済基金会はオンライン会議に参加すると共に、本日、地球倫理センター、食物と信仰連盟と共同で、「食物と信仰・全世界に栄養を届ける善法」と題したセミナーを催し、職員の裘曜陽さんが代表で参加した。
03・03	慈済基金会はウクライナ難民支援で、3日から連日80人前後のボランティアを動員して慈済内湖連絡所でエコ毛布を生産し、ヨーロッパに送った。また、11日から20日まで延べ2400人の慈済ボランティアが政府外交部で民間から寄付された支援物資の梱包を手伝った。

03・13	慈済インドネシア支部はシナルマス財閥、セダユ財閥、インドフリード社、ジャラム基金会と協力して、イスラム系組織ナフダトゥル・ウラマー (Nahdlatul Ulama) の大学のモスク建設を支援してきたが、本日除幕式が行われた。2階建て建築の同モスクは、総面積が780平米で、1000人を収容することができる。 慈済骨髓幹細胞センター主催の2022年度骨髓寄贈ケアチーム・ボランティアの認証課程が開講となった。6月まで10回行われる講座の中には、基礎知識講座及び宣伝研修講座、国際認証講座などがある。	家庭奉仕に関する学習を推し進めており、政府教育部から2021年度家庭教育の推進における優秀団体賞を授かった。
-------	---	---

03・07	慈済メデア人文志業基金会は桃園市政府と協力して当日、桃園展演センターで共に「楽しい書籍展」を催し、皇冠雜誌社及び天下文化雜誌社など100社を超える出版社が約1000冊の書籍を展示した。3月26日までの展示期間中、撮影展及び29回の講座が催された。 慈済大学児童発展及び家庭教育学部は、長期的に家庭教育及び児童と	慈済基金会は2019年11月にネパール・ランビニ州政府と貧困支援プロジェクトに関する覚書を交わした。その中にある健康センターの建設支援は2021年3月に起工式が行われたが、4日に完成除幕式が行われた。当センターは一階平屋建ての建築物で、15の病床が備えられているが、先ずコロナ禍での隔離病棟として使用される。
-------	---	---

03・17	慈済大学模擬医学センターで17日から20日まで模擬手術課程が行われ、8名の無言の良師がご提供された。20名の医学生と29名の医師及び39名の花蓮県消防局ハイレベル救助隊員が参加した。21日に出棺及び感謝追悼式、入龕式が行われた。
03・19	台北慈済病院は台湾急性重症模擬医学会、台湾災害医学界と協力して、19日と20日に共同で「国家災害生命救急講座（NDLS）」を催し、参加者が災害において臨機応変に思考することで、災害救助の質と効能の強化を図った。
03・22	慈済基金会が支援建設するモザンビークでの2カ所目の大愛村である、ニヤマタンダ郡ティカ町のンジャ大愛村の起工式が本日、行われた。468戸の住宅が建設される。

03・23	第66回国連女性の地位委員会（CSW66）はコロナ禍の影響により、14日から25日までオンラインで開催された。慈済基金会は2012年より毎年、人員を派遣して参加してきたが、今回は論文を発表する他、NGOフォーラムで同時進行の会議を2回主催した。23日の会議は主題「宗教、女性とカーボンニュートラルの道」の下で、静思精舎の徳澄師父が開幕の言葉を述べ、アメリカ総支部の曾慈慧執行長が代表で講演した。24日の主題は「男女同権と永続的な食糧システム」で、慈済基金会執行長室付きグローバル協力事務發展室職員の歐友涵さんが講演した。また、オンラインでフォーラムに参加し、世界各地のコミュニティーで指導する女性ボランティアの「自助と人助け」の足跡を報告した。
-------	--

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈济医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈济病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈济病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈济病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈济病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈济病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
大林慈济病院
640 雲林県斗六市雲林路2段248号
TEL: 886-5-5372000

慈济大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈济人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ニューヨーク支部
(New York)
TEL: 1-718-8880866

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス London

TEL: 44-20-88699864

フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

Penang

TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈濟

2022年4月20日発行・304号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈济基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈济日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈济基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈济に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)



読書で良友を得る

現代人にとって、人と集いながら本を読むのはなかなか難しい。しかし、心して求めたならば、難しいことではない。各地で行っている慈済の「読書会（勉強会）」はその証しである。毎週木曜日、高雄市岡山区のボランティアは一堂に会し、本の導き手を担当する発表者が、日常生活の実例を引用して仏典の内容を実証し、参加者の疑問に答えている。

2020年4月からは《静思法髓妙蓮華》の読書会が国内外で、少人数のチーム方式で開かれている。2021年1月から10月まで、オンラインも含め、5200回以上開かれ、延べ20万人が参加した。（撮影・黄筱哲）



慈済日本サイト 慈済ものがたり